

テューモスとプシューケーについて ——ヘラクレイトス断片85における魂の生理学——

木原志乃

Shino KIHARA

「テューモスと戦うことは難しい。何であれ欲するところのものを魂(プシューケー)を引き換えに購おうとするからである。」 *θυμῶι μάχεσθαι χαλεπόν· ὁ γὰρ ἂν θέλῃ, ψυχῆς ὠνείται*. B85DK(Plutarchus, *Coriolanus* 22)

はじめに

ヘラクレイトスの断片85は、感情抑制の困難さを「魂」(ψυχή)との関係から説明したものである。特に注目すべきは、テューモス(θυμός)と魂の両概念が対立的に捉えられていることである。そもそもホメロスの時代には、テューモスは「怒りや喜びなどの諸感情を引き起こすところの心」であり、精神活動あるいはそれが発動する器官をも意味する概念であった。そしてホメロスによればテューモスと魂とは、並列的に用いられる概念でもあった(Cf. *Il.*, 11. 334)。

それに対してヘラクレイトスは、テューモスと魂を対立的に捉えることで、ホメロスの理解に新しい視座を導入している。しかしそれを感情と理性の対立であると捉えてしまうのは早急であろう。ヘラクレイトスにおいて、テューモスが感情に相当するとしても、魂は確固とした意味における「理性」と置換可能なものではない。ヘラクレイトスの魂概念の基調にあるのは、倫理的に要請される理性的な自己というよりむしろ、自然学的に変化する生命原理としての魂なのではないだろうか(Cf. B36, B77, B117, B118, B12; B45, B115)。

そこで、本稿では、断片85の解釈を生理学的変化に基調を置くところから出発する。テューモスと魂の両概念がどのような意味であるのか、そしてそこにおける生理学的な変化をヘラクレイトスがどのように理解しているかについては、これまでも幾度か論争が展開されてきた¹⁾。まず、第一章ではテューモス

¹⁾ Cf. Diels u. Kranz, 170; Burnet, 140; Dilcher, 77f.; Guthrie, 433; Kahn, 241ff.; Kirk & Raven & Schofield, 208n.2; Mansfeld, 9ff.; Marcovich, 386ff.; Rappe, 126ff.; Robinson, 134f.; Verdenius, 115ff. 特に生理学的解釈については Verdenius と Kahn を参照。

の意味について検討し、BurnetやMarcovichらの解釈（「欲望」説）ではなく、VerdeniusやKahnによる解釈（「怒り」説）を支持する根拠を説明する。そして第二章では、テューモスと魂の生理学的変化について、諸解釈の問題点を指摘する。さらに第三章では、人間の諸感情についてのヘラクレイトスの見解を確認するとともに、断片85が内包する多層性について検討する。このようにして本稿では、ヘラクレイトスにおける魂の生理学の構造を解明するための手がかりをつかみたいと思う。

I. テューモスの意味

ヘラクレイトスの断片85（以下B85と表記する）を生理学的な観点から検討するためには、まず魂を引き換えにするとところのテューモスがどのような心的状態であるのかということが明らかにされなければならないであろう。

テューモスの意味については、[“θυμός”=欲望]（Burnet, Diels, Guthrie, Marcovich他）、[“θυμός”=怒り]（Verdenius, Kahn）の二解釈がある。

このうち「欲望」と解釈する者たちは²⁾、テューモスが“ἐμθυμία”と同様の意味であるとし、それをB85の前半部に続く語“θέλη”（欲する）とも連動していると考え。さらに彼らによれば、B77, B117にあるように、この欲望の満足は「魂の火」を「湿り気」（ὕγρον）と交換することを意味しているのである。

「大人でも、酒に酔うとどこに行くのか解らずに、よろめきながら、年端のいかぬ子供に連れて行かれる。なぜなら魂を湿らせたのだから（ὕγρην τὴν ψυχὴν ἔχων）。」 B117

「湿ったものになることは（ὕγρῃσι γενέσθαι）、魂にとっての喜び（τέρψιν）であり、あるいは死である。」 B77

B117にあるように、酒を飲んで心の欲望を満たすことは、魂の変化の尺度を逸脱することである。そしてこのような飲食への欲望は魂に湿り気を引き起こすのだから、知性が鈍ると同時に生命も脅かされる。すなわち魂が劣化すると解釈されている。

これに対して、テューモスを「怒り」の意味に解釈する者たちは、テューモスを身体的な飲食の欲望ではなく、激情・憤怒の感情であると見なす³⁾。彼らは、テューモスを魂を湿らせるものではなく、逆に火的状態へと超過させるもので

²⁾ Cf. Burnet, Marcovich, Guthrieは“(heart's) desire”と訳している。Dielsは“Herz”と訳し、“ἐμθυμία”と同じ意味とするが、本稿第二章で説明するように解釈の内容はBurnetたちとは異なっている。なお、邦訳文献では大抵「怒り」ではなく「欲情」と訳されている。

あると解釈する。多くの解釈者たちがこの「怒り」の意味を採用していないのは、これがストア派的で非常に狭い意味であるし⁴⁾、「乾いた魂が優れている」(B118)と語っているヘラクレイトスが、「怒り」によって引き起こされるであろう火的な状態を批判したとしたら矛盾することになるからである。しかし以下で検証するように、「怒り」という意味よりも「欲望」という意味が有力であるとすると根拠は思った以上に少ないのである。

1. 当時の一般的な用法として

これら「欲望」、「怒り」の意味を、B85の引用者たちの文脈の中で検証する限りでは、テューモスを「欲望」としての意味に解釈する論拠は確実なものとはいえない⁵⁾。Burnet(140)によれば、B85のテューモスはアリストテレス(*EN* B2. 1105 a7)によって間違って「怒り」という意味に理解されている。しかしアリストテレスは敢えて、「欲望」(ἐπιθυμία)や「快楽」(ἡδονή)と対比させて、正しく「怒り」の意味を強調しているのではないか(Cf. *EE* B7. 1223b22; *Pol.* E11. 1315a29)⁶⁾。同様に、プルタルコスやピロデモスも「怒り」の意味に理解している(Cf. *Plut.*, *Coriol.* 22; *De cohib. ira* 457D; *Amator.* 755D; *Philodem.*, *De ira* 27,17)。デモクリトスB236にもこのB85の前半部が引用されているが、そこにおいてデモクリトスは欲求(B70:ἐπιθυμῆν)や快楽(B214:ἡδονή)を説いた他の断片と共にテューモスに「欲望」の意味を与えていると解されているが、B298aにもあるようにデモクリトス自身はテューモスを「欲望」(ἐπιθυμία)と等値のものとして捉えたのではない⁷⁾。また、テューモスを欲望でないとするソポクレス(*OC.* 954)やプラトンの証言(*Leg.* 863B)も決定的であるし、Kahn(242)が指摘するように、ヘロドトスによる用法も——ホメロスによるより広義の用法(「心」,「精神」

³⁾ VerdeniusとKahnは“anger”と解釈(Kahnは断片訳では“passion”)。

⁴⁾ Marcovich, 388; Dilcher, 77n.36.

⁵⁾ この点はVerdenius(117ff.)を参照。

⁶⁾ *Polit.* ではB85の引用の前に、“ἀφειδῶς γὰρ ἐαυτῶν ἔχουσιν οἱ διὰ θυμὸν ἐπιχειροῦντες”と述べられている。

⁷⁾ ストバイオスも「怒りについて」という項目の下にデモクリトスB236を引用している。なお、B298aの証言を疑う立場への反論としてはVerdenius(118)を参照。

など)を踏襲してはいるが——たいていの場合は、プラトンの用法と一致するのである。これらの典拠から、テューモスの意味に関しては明らかに「欲望」ではなく「怒り」の解釈の方が、自然で正当である。もちろんホメロス的な意味での広い概念をヘラクレイトスが想定していた可能性も捨てきれない。

Robinsonも「怒り」に限定するよりもむしろ「心的な情念の座」という意味をさらなる可能性として提示している⁸⁾。しかし、「戦う」という表現は、単に漠然とした心的状態を表しているのではなく、支配しがたい強い感情だということの意味しているのではないか。たとえば悲劇作品に見られるように、メデイアは「心」に呼びかけているが、それは「怒り」の心を意味しているのである。

「ああ、わが心よ(θυμός)、それだけはしてはならない。」「けれど、わかっていても、怒り(θυμός)のほうがより強いのだ。」Eurip., *Med.* 1056/1079

テューモスが多義的であるとしても、少なくともB85の古代の引用者のほとんどが、明確に「怒り」の意味を優先させているのは疑いえないことである。

B117と同様の身体的「欲望」(ἐμθυμία)と同じものとしてこの概念を捉えた方がよいという根拠は、古代の証言の中には見あたらないのである。

2. 他の諸断片との関連から

内容的に他のヘラクレイトス諸断片との関連から見ても、テューモスを「欲望」という意味に解釈する立場が有力な根拠を有しているとは言い難い。

Marcovich(388)は、好戦的で貴族主義的な倫理を好んだヘラクレイトスは、大衆の快楽(pleasure)に対しては批判的であった(Cf. B29, B20, B125a)という点を欲望説の根拠に挙げているが、B85ではただ「戦うことが困難である」という事実とその理由(γάρ)が述べられているのであって、それを大衆の快楽への単なる批判・侮蔑と混同すべきではないであろう。

また「欲望」の意味を重視する者たちは、B77とB117との内容的な繋がりを強調しようとするが、それぞれの断片が示していることは異なっている。B117では肉体的快楽は魂を湿らせてしまい、劣化させるとヘラクレイトスが考えていたと解釈できるとしても、実際にB77では(Verdeniusが適切に反論しているように⁹⁾)、「湿り気は魂の喜びである」と言われているだけで、「欲望は魂を湿らせる」とは言われてはいないのである。B77の「喜び」(τέρψις)は人間の「欲

⁸⁾Robinson, 135(“the seat of desire/anger”).

⁹⁾Verdenius, 116.

望」(Cf.B85)や酒飲みの「喜び」(Cf.B117)と同じものではない。宇宙論的な法則に従えば、すべての変化は死を含み、同時にそれによって生を得るのであり、新しい状態（死）になることは「生」への休息なのである。すなわちXがXでなくなることはXにとっての再生への契機でもあるのだから「喜び」なのである。生成変化によって引き起こされる「死」と「喜び」は必然的なものであり、B77はこのような意味でのプロセスの連続性を示している断片である。従って「欲望」は常に湿り気への移行を引き起こすという意味で断片を理解するのは適切でない。

さらに、B43（「傲慢(ὑβρις)は大火(πυρκαϊήν)よりもいっそう消され(σβεννύναι)なければならない」）を見る限り、ヘラクレイトスが火的な状態がすべてよいと考えていたわけではないということは明らかであるから、怒り説を拒絶して欲望説を支持する根拠に、湿り気や火的な状態を基準として採用することはできない。

「消す」という表現や「大火」との対比からいえば、ヘラクレイトスは明らかに「傲慢」を火的な心の状態と考えている。一方Marcovichは、「大火」とは外部的公的な出来事（大火事）であり、「傲慢」とは政治的な意味で、大衆による暴動行為のことであると解釈する¹⁰⁾。そして横柄や放埒などの個人的な行為ではないとしている。しかし、ヘラクレイトスが既存の社会秩序や安定を維持することを第一としたとも考え難い。また、Marcovichの解釈を支える典拠であるEurip., *Ores.* 696の箇所と比べて、遙かに一般的な意味において、個人の心の状態として、この「傲慢」を考えていたであろうということは疑いない。心の状態をコントロールすることは、すべてのものを焼き尽くす「大火」を消すことが難しいのと同様に、難しいのである（Cf.B85）。このようにB43も魂の火的状態を批判した断片と理解するのが適切であろう。

以上に見てきたように、テューモスという言葉の基本的な意味内容においても、また他の諸断片との関連においても、テューモスを魂を湿らせる肉体的欲望と理解するのは、B117のみから後付けされた解釈であるという印象を受ける。「θυμός」はそもそも“θύω”という動詞と関係が深く¹¹⁾、「怒り狂う」という激情による火的状態との関連が考慮されるような語であり、B85のテューモスはそのよ

¹⁰⁾ Marcovich, 532. Guthrie(410)によっても、下層階級が自らに固有の階層に踏みとどまらないことを意味しているとされている。

¹¹⁾ Cf. Verdenius, 117(Pl., *Crat.* 419e: θύσεως καὶ ζέσεως τῆς ψυχῆς).

うな意味での「怒り」を意味する語であると理解するべきであろう。

II. 魂の生理学的変化

1. テューモスの火性と魂の火性

では「魂を引き換えに購う」(ψυχῆς ἀνέιται)ということに、どのような生理学的状態が想定されるのか。ヘラクレイトスにとっては「上り道と下り道は一つにして同じもの」(B60)なので、テューモスが望むことと、魂の購いは同時進行のプロセスである。ヘラクレイトスは魂を「永遠に生きる火」(B30)との関連で語っていることは疑いなく(Cf.B36)、魂は「火」であり、「乾いた魂は優れている」(B118)のでもあるのに対して、一方でテューモスは消火されるべき火的な状態である。では、魂の火性とテューモスの火性はどのような点で区別されるのか。

「怒り」によって魂が失われるという現象を説明するために、多くの解釈者たちは、魂の火とテューモスの火という二つの火の物質的在り方を——そのおのおのの内容を具体的に説明することなしに——素朴に前提している。

Verdenius(121)は次のように説明している。「怒りはそれ自身を表すことで、その目標に到達する。これは魂から火、すなわち生命を減じるところの熱の集中によって引き起こされる。よって怒りは常に生命(魂あるいは火)を犠牲にしている」。そしてVerdeniusは魂の火を生命と同一視するだけで、テューモスの火との身体的関連は説明していない。また、Schofieldは、怒りによって魂の火は減じられるが、徳のある人においては魂の火が増えることによってこの消失は十分に補われると説明する¹²⁾。もしSchofieldの言うように、人間が徳を備えることで魂の火が増加するならば、激情の火もさらに増加してしまうのではないかという疑問があるだろう。多くの解釈者たちがヘラクレイトスの魂が火であるということを疑わず、また、魂を質料的な火や蒸気と同一視さえしているが、魂は質料的なものとは区別される必要があるだろう。

魂が劣った状態には水的になる場合(B117)と火的になる場合(B43)の両側面がある。後者の倫理的に劣った火と魂の「火」性との区別に対して、一つの回答を与えているのがKahnである。Kahn(249)によれば、最も賢い魂は、魂が「乾いた、輝いた」と言われているだけであって(B118)、他の断片でも魂は「乾

「湿」双方を要素的な原理として捉えた単一の実体として語られているのであって、混合物として語られているのではない。従って魂の火と倫理的に劣った火

¹²⁾ Kirk & Raven & Schofield, 208n.2.

とは区別されるというのである。この点で、Kahnは魂の火性の実質を適切に捉えているといえよう。

2. 身体における魂の燃焼

ところがKahn(239f., 243)は、魂を水からの「蒸発気」(ἀναθυμίασις)によって作られる空気や息と一致すると理解してしまっている。そして魂=「蒸発気」との関係からも、魂とテューモスは物質的に重なり合うと主張している。この点に関して、Kahnの魂理解はテューモスの物質性と再び混同されてしまっている。しかし、ヘラクレイトスによれば、魂は、身体全体としての構造の中で燃焼しつつ、自らをあらわすものであり、万物と交換可能な黄金にもたとえられる。B85で市場の交易のたとえでテューモスが「購う」と表現されているのは、B90にあるような、万物と交換可能な魂の火に対して購うという意味なのである。テューモスは「蒸気」として身体における個々の物質であることになるから、魂は身体全体を統括しながらその物質によって消費されるものなのである。Kahnの言うように、魂が空気のような火と水の間接物に過ぎないのであれば、身体における有機的な調和は失われたままであろう。

また、Diels(170)は、「魂は命の意味ではない。欲望は命を購うのではなく、魂の一部分だけを購う。すなわち欲望によって身体に譲歩した分だけ、神的な火が減少するのである」と解釈するが、Verdenius(115)も指摘するとおり、ヘラクレイトスは欲望を身体に限定していないし、身体と魂を統一的に捉えている(Cf.B67a)。ヘラクレイトスにおいては、身体的機能と精神的な機能とが区別されているとは考えられないゆえ、Dielsの解釈はヘラクレイトスの観点から外れたものである。身体と精神は一つなので、身体的に火の状態が超過すれば、全身で魂の力が作用し、これを消火せねばならない。その意味でテューモスの火(あるいは火へ向かう方向性を持った物質)が望むところのものを「魂と引き換えに購う」のである。

このように、魂もテューモスも蒸気化と関連を持つような同質で一体のものとするKahnの見解は身体の統一的な機能としての魂の働きを適切に捉えていない。しかしながら、たとえばVerdeniusの指摘したような「熱の集中」によって、魂からテューモスへと身体的「力」が移行するというのが適切な捉え方であるということの内に、身体と魂の統一性は見取れるのである。Marcovich(388)は「(テューモスが) 怒りの意味だと、"θέλω"という言葉がうまくあわない。心は意志を持つであろうが、怒りは意志をもたないであろう」(Cf.B110)と指摘しているが、怒りの自然学的なプロセスを説明するために、すなわちテューモス

が熱を吸収するという状態を表すために「欲する」(θέλω)が用いられているのだとすれば問題はない。さらに、魂はこのような自然学的な全体的なプロセスの中で、乾・湿といった反対的な極性を保ちつつ、生を保持していくのであるから、ヘラクレイトスの魂とは、アリストテレスや他の医学思想における熱、冷、乾、湿のデュナミスの構造を先取りしているとも考えられる。ヒッポクラテス文書の*Epid.* VI.5.5——この箇所の魂概念(医学文書では*Vict.*以外ではあまり用いられることのない用語)にヘラクレイトス思想の影響を指摘する研究者も少なくない——では、テューモスによる生理学的現象を次のように説明している。

「テューモスが原因となる症状は次のものである。激怒すると(ὀξύθυμῳ)心臓と肺がそれ自身のところへと収縮し、熱と湿り気が頭へのぼる。…魂(ψυχή)をめぐることは思慮深くすることに他ならない。」¹³⁾

この箇所のテューモスは明らかに「怒り」の意味で用いられている。そしてこの医学文書では、「熱」と「湿り気」の頭部への移行によってバランスの崩れた身体状態がまず示され、さらにそれと対比するかたちで、それによって劣化させられるような、身体をめぐる「魂」のメンタルな機能が示唆されている。この限りでは、この医学文書においてヘラクレイトスのB85のテューモスと魂との生理学的関係が的確に敷衍されているといえるのではないか。

このように、ヘラクレイトスの生理学的プロセスにおいては、魂の乾・湿(および熱・冷)の極性は、生命を保持する身体的な「力」を有していると同時に、知性的な側面における活動性も備えているのである。魂の知的側面は、生理学的変化と矛盾しないばかりか、むしろ同じ物質的位相を保ちつつ説明されうるのである。

III. 「戦い」と「命」

B85の前半部「テューモスと戦うこと」も後半部「魂と引き換えに購う」も、それぞれ当時一般に用いられる言い方である。ヘラクレイトス断片の中で特に注目される「魂」という用語も“ψυχῆς ὠνεῖται”という当時一般的なフレーズ(「命がけで」)の中で用いられている(Eurip., *Med.* 968; Xenoph., *Cyr.* III. 1. 36)。そして前半部「怒りと戦うことは困難である」という一般的で格言的な言葉を前置きとして、後半部で「なぜなら」(γάρ)という言葉を使って、ヘラクレイトスの真意を語っている(Cf. B88)。ヘラクレイトスにおいては断片の表層的な意味の背後に隠された哲学的な含意があるとすれば、おそらくB85では、この前半部

¹³⁾ テクストは Littré, V.316.5-10による。Littré 自身は “θυμός” を “moral” と訳す。

と後半部の文章の繋がりにあると思われる。前半部と後半部の繋がりにおいて、テューモスと魂は表層的に見ると、並列的で同じ事柄を意味しているようであるが、実際はヘラクレイトスの視点から見れば統一的かつ相互に対立的なものなのである。すなわち魂とテューモスとは一つの同じ物質的現れであるとしても、そこには生理学的な力のせめぎ合いがあるのであり、そこにおける自然学的な力の移行ということによって、怒りと戦うことの困難な理由が後半部で説明されているのである。

Mansfeldは、アリストテレスらの引用を典拠に、全く新しい視点から、B85を解釈し直している¹⁴⁾。すなわち「テューモスと戦う」(θυμῶι μάχεσθαι)を

「テューモス（怒り）の状態で戦う」に、「難しい」(χαλεπόν)を「危険である」に、それぞれの語のこれまで一般的に解釈されてきた意味を別の仕方を読み変えた。それによってMansfeldは断片の表層的な意味を、①「怒りの状態にある人と戦うことは危険である、なぜならその人は命の危険を冒す心構えであるから」という意味(Cf. Ar., Pol. 1315a)、②「怒りの状態にあるときに戦うことは危険である、なぜならその人は自らの生命を脅かすから」という意味、の二つの可能性を提示した。

おそらくヘラクレイトスは戦いにおいて実際に命を落とすことを、心の中の葛藤に置き換えて、それを感情と理性のせめぎ合いとして語っている。それは生理学的に見れば、単なる火と水のせめぎ合いなのではなくて、火と水（および土）そのすべてを含めた身体全体を魂によって調和させるべく、魂の身体的結合力とテューモスにおける火へと上昇する力とのせめぎ合いが意図されているのである。B85の「戦う」(μάχεσθαι)ということ、「難しい」(χαλεπόν)ということには、このような重層的な含意があると言えるのではないか。

最後に、B85では、文脈上も意味上も、魂が主役であるとは決して言えない点にも注意しなければならない。欲する(θέλει)主体も魂を引き換えに購う(ὠνείται)のもテューモスなのである。ヘラクレイトスはB85で「理性」について直接に語ってはいないし、魂がテューモスに戦うべき主体とならなければならないとも語ってはいない。しかしながらテューモスと魂との生理学的関係に限って言えば、身体の統括的な火である魂が優位に置かれていることは明白である。よって生理学的な魂における、全体と部分の反対的な統一性に基づいて、魂からテュー

¹⁴⁾ Mansfeld, 16f. 他の解釈者たちは、なぜ「命がけ」でなければならないかについて注意を払っていない。Dielsのように「魂の一部だけを購う」と理解したり、身体的欲望を想定するのでは、テューモスとの「戦い」の意味がとらえられていない。

モスへの力の移行としてB85の生理学を理解する限りにおいて、理性と感情の対立がB85に含意されているとも解釈できるのである。

結語

ヘラクレイトスはB85で、倫理的な努力について説明しているかにみえても、実は火や水の相互変化についての生理学的理論から逸脱した状態を想定しているわけではないし、また欲望の満足の状態であるところの水の超過によって魂が湿ったと語っているのでもない。ヘラクレイトスは、火の超過によって魂が劣ったものになるということを説明するために、魂からテューモスへの力の移行を想定している。全体的な有機的連関の下での物質的变化によって、魂自身の結合力が弱められ、身体の調和も失われるのである。このような魂と身体全体の生理学的な関連こそがB85で示唆されていたのである。

(京都大学文学部・研修員)

[参考文献]

ソクラテス以前の哲学者の断片番号は、Diels, H. u. Kranz, W. 1951-1952⁶. *Die Fragmente der Vorsokratiker*. Berlinに従った。なお、本文中の下線はすべて著者自身による。

Burnet, J. 1930 (4 ed.). *Early Greek Philosophy*. London.

Dilcher, R. 1995. *Studies in Heraclitus*. *Spoudasmata* 56. Olms.

Guthrie, W.K.C. 1962. *A History of Greek Philosophy Vol.1*. Cambridge.

Kahn, C.H. 1979. *The Art and Thought of Heraclitus*. Cambridge.

Kirk, G.S. & Raven, J.E. & Schofield, M. 1983 (2 ed.). *The Presocratic Philosophers*. Cambridge.

Littre, E. 1962. *Oeuvres complètes d'Hippocrate. Traduction nouvelle avec le texte grec en regard*. V, Paris, 1851/ Adorf M. Hakkert, Amsterdam.

Mansfeld, J. 1992. "Heraclitus Fr. B85DK." *Mnemosyne* 45.

Marcovich, M. 1967. *Heraclitus*. Editio Maior, Merida.

Rappe, G. 1995. *Archaische Leiberfahrung*. Berlin.

Robinson, T.M. 1987. *Heraclitus Fragments*. Toront.

Verdenius, W. J. 1943. "A Psychological Statement of Heraclitus." *Mnemosyne* 11.